

仲良し学級と歩んで12年

広陵小の藤澤淑子さん

にこやかな笑顔で子供たちの相手をしているのは藤澤淑子さん（国際10期・桂木在住）。特別支援のボランティアを始めて12年のベテランだ。5月23日、北区会の3人が広陵小の特別支援学級（仲良し学級）に藤澤さんを訪ねて話を聞いた。ここの仲良し学級には7人の子供たちがいる。先生4人と藤澤さんのようなシルバー組など4人が子供たちの面倒をみている（昨年、本欄に登場願った石場さんもその1人）。

この日、藤澤さん支援は2時間目から。相手は小3のNちゃん。活発で愛くるしい女兒だ。プレールームで滑り台、積み木、ボール遊び、隠れんぼなどを一緒にやる。部屋中を走り回り、キャツ、キャツとはしゃぐので藤澤さんもつき合うのが精いっぱい。

3時間目は図工の時間。小1のRちゃんを連れて図工の教室へ。「でこぼこ発見」というテーマでウチワやカゴなどの上に画用紙を置いて、上からクレパスで擦って模様を浮かび上がらせる――。先生の説明を聞いて、わいわい言いながら、「できたできた」「ほくはウチワだぞ」「私はこんな模様」。みんな夢中で画用紙に取り組む。Rちゃんも藤澤さんの手を借りてウチワにチャレンジ。「あら、うまくできたね。赤の模様がきれいやねえ」。藤澤さんの話しかけにRちゃんは嬉しそうだ。

藤澤さんの担当は毎週木曜日の2時間目と3時間目。朝9時半には仲良し学級の教室へ顔を出し、担任の先



⑤ 3年生のNちゃんと積み木で遊ぶ藤澤さん

⑥ 1年生のRちゃんとは図工の授業をうける

生からその日に受け持つ児童が指名される。教える学科は国語や算数、書道や運動もある。

仲良しの子は感情の起伏が激しく、すぐ泣きだしたり機嫌が悪くなったりするので目が離せない。10年間やっても手加減がよくわからない時がある。そんな時は抱きしめてあげるスキンシップが有効だとか。日頃は先生の邪魔にならないよう、ケガをさせないように、気を遣っている。

藤澤さんは75歳。カレッジへ入るまでボランティアとは縁がなかったが、今ではグループわの電話相談を続け、北区会の書道の会の講師も引き受けている。

時に、うれしいこともある。外で卒業生に出会うと「先生！」と大声で駆け寄ってくれる。やって良かったと心から思う。「子どもが好きなので体力の続く限りは今のボランティアを続けたいですね。あと5年ぐらいいかなあ」。意欲は充分とみた。

（取材 南形徹 ・写真 芦田義和）



ボランティアの現場 5